

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720127

研究課題名（和文） 〈近代の超克〉論の文学論的効果－論争と同時代作品の協働連関

研究課題名（英文） The literary effect of "Overcoming Modernity": interactive relations between the debates on "Overcoming Modernity" and contemporary literature.

研究代表者

内藤 由直 (NAITO YOSHITADA)

龍谷大学・文学部・講師

研究者番号：60516813

研究成果の概要（和文）：

本研究は、1942年及び1959年に提起された〈近代の超克〉論と同時代文学との協働連関を検証し、戦中戦後それぞれの〈近代の超克〉論が当時の文学表現に及ぼした効果を把握しようとしたものである。〈近代の超克〉論は、これまで時局に便乗した機会主義的な議論として理解されてきたが、本研究では戦中戦後の〈近代の超克〉論それぞれに先行する国民文学論との結節点を開示することで、〈近代の超克〉論が先行研究によって評価されてきたような単なる超国家主義イデオロギーではなく、昭和文学の中心的課題である「政治と文学」の対立問題を引き受けて議論した文学論であったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study's intention is to confirm the interactive relations between the debates on "Overcoming Modernity" of 1942 and 1959 and contemporary literature, and to grasp the effect of these debates on literary expression of the time. The debates on "Overcoming Modernity" have been considered until now to be opportunistic arguments exploiting the war. However, through presenting the nodal points of the wartime and postwar debates on "Overcoming Modernity" and those preceding each on "National Literature," this research has revealed that these debates were not, as previously held, mere ultra-nationalist ideology, but discussions of literary theory which approached the issue of conflict between "literature and politics," a central question of Showa-era literature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	900,000円	270,000円	1,170,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：国文学、文学論、思想史、〈近代の超克〉論、国民文学論、政治と文学

1. 研究開始当初の背景

戦中戦後の〈近代の超克〉論がともに、当時を代表する作家・批評たちによって提起された議論であったことはよく知られている。しかし、〈近代の超克〉論に関する国内外の先行研究は、当該議論を文学史上の問題としてではなく、思想・哲学の問題として捉え、その観点から戦中の議論における戦争協力の一面、および戦後の議論が戦中の議論を追

認した側面について検証・批判してきた。ここでは、超国家主義イデオロギーとして機能した〈近代の超克〉論の役割を指弾することが重点的なテーマとされ、議論と当時の文学状況との関係に対する考察は十分に深められてこなかった。

近年、「日本浪漫派」との思想的連関を手掛かりとして〈近代の超克〉論への文学論的アプローチを試みる研究が現れてはきたが、

戦中の議論のみが特化され、一部の作家の生い立ちからその思想的背景を探るだけで、戦中戦後の議論における先行論争との連続性や実際の文学作品との相互交渉を読み解く作業はまだほとんど手付かずの状態にある。つまり、〈近代の超克〉論を文学論として捉える認識の枠組みは未確立の状態であると言える。

以上の背景から、〈近代の超克〉論に関する既存の研究には、当該議論における文学論としての側面を十分に評価できていないという問題点があると指摘することができる。戦中戦後の〈近代の超克〉論は、いずれもそれらに先行する国民文学論争に参加していた文学者たちによって提起された議論であったが、〈近代の超克〉論を思想・哲学の問題として把握する従来の研究の観点では、国民文学論との連続性を捉えきれず、また文学論としての側面を見逃すことで、同時代文学作品に〈近代の超克〉論が与えた影響を見極められないのである。

従って、往事の作家・批評家たちはなぜ〈近代の超克〉論を提起したのか、そして、同時代の文学作品はその議論をどのように受容したのかという問いが解決すべき課題として残されているのである。

こうした観点から〈近代の超克〉論を検証した本格的な研究成果は未だ現れていない。換言すれば、国民文学論の行方がまだ検証されていないのである。国民文学論争研究の空白を埋めるべく、資料を精査した過程が、本研究の着想に至った経緯となっているのである。

2. 研究の目的

本研究は、戦中戦後の国民文学論争（1937年・1952年）に引き続いて提起され議論となった〈近代の超克〉論（1942年・1959年）と、その同時代文学作品を主な研究対象として、〈近代の超克〉論における文学論としての意義を明らかにしようとするものである。

この目的を達成するために、本研究は関係文献の調査・分析を行いながら、まず戦中戦後の〈近代の超克〉論と先行する国民文学論の結節点を明らかにし、その次に〈近代の超克〉論と同時代文学作品との協働連関を見極めていく。

本研究に先立って、戦中戦後に提唱された国民文学論を研究し、同時代文学作品や先行する〈政治と文学〉論争との結節点を突き止めることで、国民文学論が時局に便乗したナショナル・イデオロギーの再生産装置ではなく、当時の文学状況と密接な協働連関を持つ文学論であることを明らかにしてきた。

本研究は、これまでの研究成果を敷衍して、さらに対象とする時代範囲を拡大し、戦中戦後の文学論争の様相をより明晰に把握する

ことを目指すものである。

3. 研究の方法

〈近代の超克〉論が国民文学論に参加した文学者たちによって議論されていたことは明らかだが、議論の内発的な展開過程と同時代文学への具体的影響関係が十分に明らかにされてこなかったため、その文学論的意義の解明は滞ってきた。往事の文学者たちは、なぜ〈近代の超克〉論を提唱したのか、そして、文学にとって〈近代の超克〉論とは何であったのか？ その動機と真意を解明するためには、〈近代の超克〉論が生起するに至った経緯とその実際効果の考察が必要がある。そこで、本研究では次の二点に重点をおいて研究を進め、〈近代の超克〉論の意義およびそれが提起されるに至った過程を明らかにしていく。

(1) 〈近代の超克〉論と国民文学論との結節点の解明

戦中戦後の〈近代の超克〉論と先行する国民文学論争との関係を検証し、それらの議論間で連続する文学的係争点を析出することで、〈近代の超克〉論が時局便乗の機会主義的な議論ではなく、時代の要請によって提起された文学論であったことを明らかにする。

戦中では林房雄や亀井勝一郎、戦後では竹内好が双方の議論に一貫して関わっているため、彼らの言説や作品を検討しながら論争間の結節点を見極めていく。その作業により、戦中戦後の〈近代の超克〉論が国民文学論からどのような文学的課題を引き継いでいるのかを確認し、先行する文学論争において十分に議論を尽くされなかった係争点を継続して議論する文学論であったことを明確にする。

(2) 〈近代の超克〉論と同時代文学作品との協働連関の解明

次に、上記で明らかになった係争点が、同時代文学作品の中でどのような表現として表れているのかを吟味し、〈近代の超克〉論が時代の中で実際に機能した文学論であったことを明らかにする。

〈近代の超克〉論と同時代に執筆され、深い関わりを持つ文学作品としては、林房雄の小説『青年の国』（1942年）や貴司山治『維新前夜』（1940-44年）、戦後の作品では山岡荘八『小説太平洋戦争』（1962-71年）が想起される。これらの作品と〈近代の超克〉論との結節点を検証することにより、当該議論が出現を期待した文学像を明確化するとともに、その文学論的役割を具体的に把握する。また、〈近代の超克〉論との関係から作品を再検討することで、それら作品の文学史的位づけを改めて評価していく。

4. 研究成果

(1) 〈近代の超克〉論と国民文学論との結節点を見極めるために、〈近代の超克〉論に関係する資料を収集し、これまでに入手した国民文学論関連資料と付き合わせて、それらに連続する問題点がないか確認する作業を行った。具体的に言えば、戦中では林房雄、戦後では竹内好が発表した、国民文学論から〈近代の超克〉論までの一連の議論に注目し、文学論争間の連続性を検証した。

林房雄はプロレタリア文学運動の崩壊期に〈政治と文学〉論争を引き起こし、政治の優位性論を批判していたが、国民文学論において政治の優位性論を内面化した国民文学の創出にコミットし、政治と文学の二項対立を解消する文学形式を確立しようと試みた。〈近代の超克〉論においても、林は戦争という政治状況と文学を一体化させようと考え、戦争の問題を文学の問題として、あるいは文学の問題を現前の戦争の問題として捉えていた。

戦後の竹内好の議論もまた、平野謙や荒正人と中野重治との間で議論された戦後〈政治と文学〉論争への批判を起点として国民文学の確立を提起し、〈近代の超克〉論において戦争（政治）と文学の不可分の関係を理論化しようと試みた。

即ち、国民文学論が揚棄を試みた「政治と文学」の対立問題が戦中戦後ともに、〈近代の超克〉論の中へ織り込まれていることが明らかとなったのであり、これを確認することで、〈近代の超克〉論が既存の研究において評価されてきたような単なる超国家主義イデオロギーではなく、先行する文学論争の課題を継承して議論する文学論であったと評価することが可能となった。

「政治と文学」の対立問題は、1920年代のプロレタリア文学運動の時代より絶え間なく議論されてきた問題である。ゆえに、本研究によって、1920年代から50年代の日本近代文学を貫流する問題系の一つとして「政治と文学」の問題を認識することが可能となり、〈近代の超克〉論を「政治と文学」の対立問題の帰結、あるいはプロレタリア文学運動の終着地点として位置づけることができるようになったと考えられる。

(2) 次に、〈近代の超克〉論と同時代文学作品との協働連関を見極めるために、戦中戦後それぞれの論争と同時期に発表された小説を取り上げ考察した。戦中の作品では林房雄の小説『青年の国』、貴司山治の『維新前夜』、戦後の作品では山岡荘八の『小説太平洋戦争』の分析を行った。

『青年の国』は「満州国建国十周年慶祝会」の委託を受けて執筆された作品であり、満州を舞台とし、当地の日本人が満州国を建設し

ていく歴史過程を描いた作品である。これを分析する中で本研究は、作品の中で繰り返し言明される西欧批判と日本回帰の表現が、作者もその渦中にいた同時代の〈近代の超克〉論と密接に関連していることを指摘し、〈近代の超克〉論と同時代文学が協働して時代に対峙していたことを明らかにした。

また、『維新前夜』は幕末の日本を舞台とし、尊皇攘夷に身命を捧げる剣士を主人公とした大衆小説であったが、これも太平洋戦争の理念を形象化し、同時代の〈近代の超克〉論と共振する作品であることが確認できた。

戦後の作品については、『小説太平洋戦争』を分析し、太平洋戦争を小説化した本作品の中に、戦争を対帝国主義戦争、解放戦争と見立てる戦後の〈近代の超克〉論のモチーフが内面化されていることを明らかにし、作品と〈近代の超克〉論との不可分の関係性を剔抉した。

このように、戦中戦後の具体的な文学作品と〈近代の超克〉論との結節点を考察することによって、戦中戦後の〈近代の超克〉論が単なる政治的・政策的議論、あるいは超国家主義イデオロギーではなく、同時代の文学作品と密接な関係を持ち、実際的な効果を及ぼした文学論であることが明らかとなった。

〈近代の超克〉論は現在でも思想史・哲学史上の研究対象であり続けているが、本研究は〈近代の超克〉論の文学論的役割を考察することで、これまで超国家主義イデオロギーの側面のみを注視してきた〈近代の超克〉論研究の欠落を補完することができたと考えられる。また、戦中戦後の国民文学論と〈近代の超克〉論における連続性、および具体的作品との相互交渉に着眼的を置くことで、〈近代の超克〉論を文学論として評価する視座を構築することができたと考えられる。

残された課題として、〈政治と文学〉論争→国民文学論→〈近代の超克〉論という一連の文学論争が、戦中と戦後に反復されたのはなぜか、という問題がある。敗戦を挟んで同一の論争が同じ順序で繰り返された必然性を、今後の研究において検討していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①内藤由直、貴司山治『維新前夜』と近代の超克 思想戦とアジア解放の幻、フェンスレス、査読無、第1号、2013、3-18

〔学会発表〕(計2件)

①内藤由直、貴司山治『維新前夜』論——未完の〈近代の超克〉——、占領開拓期文化研究会、2012年12月26日、立命館大学

②内藤由直、〈近代の超克〉論と同時代文学——
国民文学論の行方——、龍谷大学国文学会、
2012年6月30日、龍谷大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

内藤 由直 (NAITO YOSHITADA)

龍谷大学・文学部・講師

研究者番号：60516813